

神に称賛される私たちの生き方 ～判断の基準 自分がどこに～

「二つの板挟み」

ピリピ 1:21 ~ 26

■ 最初に…

今年もう終盤ですね。年始の願いや豊富を覚えていますか？現実という臨場に生きる中、願いを忘れていないでしょうか。過去の経験に基づく、古い価値観で判断して、どうせ変わらない…そんな毎日を生きていないでしょうか。稲刈りの時期ですね。子ども達と長年農業体験をしています。自然の営みである農業には様々な問題が起こります。雨が降らない、ひえが生える、台風が来る…。この現実には私達にはどうにもできないことですが、不安を抱いて日々を過ごすのか、それとも信じて収穫を待つのかは選ぶことができます。

■ どう見えていますか？

鏡の前に立った一人の女性。自分の小じわ、白髪…。鏡の前に立ち、悪いところばかり見ては落ち込む日々。そんな妻に夫が言ったのは、「視力がちっとも衰えないね」でした。私達の目は何を見えていますか？年齢とともに、体力や気力は衰えますが、私達の見目はなかなか変わることがありません。人の粗を探し、悪いところ、足りない所探し…。自らを得ようとするものは失い、自らを失うものは得るとするのは聖書の約束です。自分の欲を満たす為であったり、自分の不安を拭うためではなく、願うべきことを知っているのでしょうか。得られなかった過去の傷により、執着しているものはないでしょうか。評価されたい、褒められたいというずれた願いはないでしょうか。目的がわからず、結果を求めると、本質ではないもので自分を満たすようになってしまいます。願いが正しければ、たとえ目の前の現実が悲惨でも、物事を見る目は変わります。パウロの願いは変えられたので、見方が変わり、生き方が変わったのです。

■ 正しい願いと、板ばさみ

『私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。しかし、もしこの肉体のいのちが続くとしたら、私の働きが豊かな実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいのか、私にはわかりません。私は、その二つのものの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまっています。』(ピリピ 1:21-23)
1 つ目のパウロの願いは、イエス様の元に行くこと。苦しみから逃れたいのではなく、ひどいことをしてきた自分をイエス様会って赦してほしいという願いでしょう。
2 つ目は生きること。非難と屈辱と痛みを耐えなければならない現実を選び、生きて福音を伝えるならイエス様のための働きが豊かな実を結ぶことになることを確信していました。私達は神様と約束した正しい願いと自分本位な願いの板挟みになっていないでしょうか

■ 正しい判断を奪うのは不安

正しい決断をしようとする時に妨害するのが不安。先を見ることのできない私達に不安があるのは当然のことです。心配事のほとんどは「取り越し苦労」に過ぎないというロバート・リー博士の研究。先進国では 37%の人が毎日不安を感じているそうです。37%の心配性の群に、何が心配か、この先何が起こるのかについて記録してもらいました。心配事の 85%において、実際は「よいこと」が起き、悪いことが起きてしまった残りの 15%も、そのうち 79%は思っていたより良い、計算すると、97%の心配が無駄、つまり、とり越し苦労だったそうです。また、ハーバード大心理学者マシュー・キリングスワース氏は 2,250 人を対象にマインド・ワンダリングに関する行動心理調査を行いました。生活時間のうち 47%もの時間、つまり一日の半分を、このマインド・ワンダリング(瞑想)に費やしていることがわかりました。心配をやめることは聖書で命がけされています。『しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。きょうあっても、あすは灰に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくださ

ないわけがありませんか。信仰の薄い人たち。そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。』(マタイ 6:29-34)
神様は必要なものを与えてくれているのに、失うことを心配すれば、それを招くわけです。また安易な解決が人生を悪くすることにも氣をつけなければなりません。例えば貧しい人に一時のお金が与えられるとどうなるでしょうか。神様が与えてくださるのは貧しくても大丈夫と言える平安なのです。

■ 苦難の中で学ぶ

神様は私達を愛するがゆえに、苦難の中で平安を与えられます。アダムとイブを神様が追放したのは、怒りによってではありません。苦難の中で生きる力を得、神様とともに生きることを選ぶためです。ダビデは患難の中で神の奥義を学びました。苦難や問題は神様の愛ゆえに与えられることを信じましょう。『だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。』(マタイ 6:33・34)
『神の国とその義』とは『愛』です。『愛』があるなら不安にはなりません。不安に襲われた時、私達が向けるべき視線は神様の愛です。神は決してあなたを見捨てはしません。必ず苦難を通して最善を与えて下さいます。だからこそ『あすのための心配は無用』なのです。漠然とした不安を捨て、神様の愛を信じて、その日に自分がすべき事を着実にやってみてください。あなたの人生は着実に変わります。心配していると、すべきことができません。うまくいかないのは足を踏み出さないから、または途中で後悔して戻ることから。心配をやめて、一歩踏み出しましょう。

■ プライドを保つ

『しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためには、もっと必要です。…私のことに関するあなたがたの誇りは、キリスト・イエスにあって増し加わるでしょう。』(ピリピ 1:24-26)
日本には古くから、日本の文化や伝統を受け継いで今も素晴らしい継承しておられる方々がたくさんおられます。こだわりの職人＝頑固なイメージがありますが、本来の「頑固」とは「本来自分がすべきことに対して徹底している生き方」だと言えます。本当の頑固は自分のした事に落ち度がある事が許せないで、自分の落ち度を素直に認め修正します。それが『誇り』であり『プライド』です。誇り＝プライドは相手に向けると、人を裁く正義。相手に自分の誇りを押し付けるのは横暴。本来のプライドとは本来の自分の姿を自分らしく保つことです。また、ルールは自分の立場や正義を守るためではなく、弱い人を守るために、大切なことを守るためにあります。パウロの誇りは自己防衛ではなく、神様の使命に生きること。プライドは使命を守るなら保たれ、増し加わるのです。

■ 最後に…

神とともにいることが私達の願いです。神を慕う素直な思いと、苦しくてもプライドを守って生きるパウロのような信仰者になりたい、そう願います。

『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くしてあなたの神である主を愛しなさい。』(申命記 6:4-5)

この戒めを守って生きられますように。

神の願いと自分の願いの板挟みで苦しむ人生ではなく、神への願いを持ち、神が与えてくれた自分のプライドを守るための願い、両輪ともなった人生を生きることができまうように。私達が主に向かい、試練の中でも成熟を望んで生きることができまうように。

(要約者: 藤原友規子)

(2021年10月3日)